図書館情報メディア研究第９巻１号１～10ページ　　2011年

周作人における『徒然草』受容
－兼好の影響を中心に－

韓　　玲　姫*，綿　抜　豊　昭**

Tsureduregusa's Reception in Zhouzuoren：With a Focus on Kenko's influence

Lingji HAN, Toyoaki WATANUKI

抄録

本稿では，周作人の「『徒然草』抄」翻訳をもとに，周作人の『徒然草』受容とそれが周作人の思想にいかに影響を与えたかを検証し，周作人が辿りついた「閑適」文学における「苦味」の解明を試みた。

本研究を通して，周作人の『徒然草』に対する理解は，思想において内海弘蔵の趣味論を継承し，それを発展させたということを明らかにした。さらに，新文化運動初期の「文学革命」，「思想革命」といった革命主義から，次第に政治に背を向け，文学の「閑適」へと変わっていく中で，兼好の影響が大きかったことを検証し，周作人の「閑適」文学における「苦味」の一端は，決して彼の思想の苦しさではなく，周作人の趣味の表れであり，彼の「温和な情緒」であったという結論を得た。

Abstract

In this text, based on the 'Tsureduregusa' translation of Zhouzuoren, and how it influenced his thought is verified with the 'Tsureduregusa' receipt of the Zhouzuoren. And the clarification of "Bitterness" literature that Zhouzuoren reached at last was tried.

Understanding to 'Tsureduregusa' of Zhouzuoren clarified that the hobby theory of Utsumikozo was succeeded to in thought, and it was developed through the present study. In addition, it was verified that the gradual do turn one's back to to politics from the revolutionism "Literary revolution" and "Thought revolution" of new cultural moving initial, and the influence of Kenko was large when having changed into "leisurely" of literature.And a part of "bitter taste" in Shusaku person's "leisurely literature" was never painful of his thought, and obtained the conclusion that it was appearance of Shusaku person's hobby, and it was his "Mild emotion".

* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程
Doctoral Program
Graduate School of Library, Information and Media Studies,
University of Tsukuba

** 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科
Graduate School of Library, Information and Media Studies,
University of Tsukuba

1. はじめに

五四新文化運動[1]以降周作人は，北平（現在の北京）八道湾の書斎名を「苦雨斎」と名付け，後に「苦茶庵」と改名するように，彼はとりわけ「苦」に拘っている。それは，五四新文化運動以降に出版された周作人の作品集名にも窺われ，『苦茶随筆』（1935）[2]，『苦竹雑記』（1936），『苦口甘口』（1944）のように，「苦」の文字が見られる。

このような作風は中国で「閑適」文学と評され，周作人は中国近･現代の「閑適文人」と称されている。しかし，日中戦争（1937 ～ 1945）[3]勃発前，「閑適」文学は現実を回避し，社会から逃避し，政治から身を隠している「社会性欠如」の文学として批判の対象となっていた。

それに対して，周作人は「拙文は外観が閑適のようで，誤解を招きがちであるが，一人，二人の旧友はその苦味が分かる。」[4]と述べ，自分の「苦味」文学は形から見ると現実を離れ，社会から逃れた「閑適」に見えるが，決してそうではなく，その「苦味」について本当に理解しているのは一人か，二人の友人しかいないことを示唆した。その「苦味」の本質は一体何なのかを究明することは，周作人の「閑適」文学と彼の思想を理解する上でとても重要である。

銭理群は「周作人の散文には「浮躁凌厉」（焦燥で猛烈的）と「冲淡平和」（淡泊で温和）という二種類の文体がある。社会的意義から見た場合，前者の思想がもっと積極的だということは明白であり，それゆえに研究者にしばしば引用され，論述されている。しかし，真に周作人の創作上の個性を示し，中国の現代散文芸術に独特な貢献をしたのは後者であり，事実上もっと影響が大きい。」[5]と指摘した。

新文化運動の中で周作人は封建勢力への批判と新しい文学理論の提唱者として中国文壇に登場し，その時の文学思想が社会に与えた影響が強かったのは周知のことではあるものの，新文化運動退潮後の思想の変化とともに現れた「閑適」文学こそ，彼の文化心理と審美情趣の表れであり，「周作人が中国現代散文小品における代表的な作家となる最も基本的な原因」[6]だと考えられる。

周作人の「閑適」文学と日本文学とのかかわりについて劉岸偉は，夏目漱石の「低徊趣味」や「余裕のある文学」観に着目して，周作人が漱石の影響を受けたことを検証し，「周作人はこの『语丝』（週刊誌，1924 年創刊）を新たな始発駅として，「低徊趣味」に沈潜した「余裕のある」文学へと再出発した。」[7]と述べた。

そして，呉紅華は周作人が兼好に引かれたのは，「非僧非俗」の境地の中で「世俗」と「仏道」と「遁世」の世界を自由自在に往還できたことであり，芭蕉に共鳴したのは，隠遁の生活に入ってからの彼の「一貫して変らない」という「不易流行論」の意識で,「この前者（兼好）と後者（芭蕉）とを合一させることを精神の拠りどころとしての閑適の裏付けとしながら，自己の文学形式をはかった。それが「閑適小品」と呼ばれる作品群である。」[8]と指摘した。

一方，潘秀蓉は周作人の「『徒然草』抄」翻訳が郁達夫（『徒然草』選訳，1936），王以鋳（『徒然草』完訳，1987）の翻訳と異なる訳文があることに注目し，周作人が当時参考とした底本と注釈書を検証した。そして，「翻訳にあたって周作人は，自分の好みを加え，注釈書を選び，中国語の訳語を取捨選択することによって，周作人としての個性や物の見方を反映させた新しい兼好像を創出した。」[9]と翻訳家としての周作人の個性の一面を明かした。

周作人は 1965 年，友人の鮑輝明宛に書いた手紙に「私の受けた日本の影響といえば，最も顕著なのは兼好法師からのものだと言えるだろう。」[10]と述べた。筆者は周作人の言う「兼好法師の影響」というところに着目し，周作人の「『徒然草』抄」翻訳を通して，周作人の『徒然草』受容とそれが周作人の思想にいかに影響を与えたのかを検証し，周作人の「閑適」文学における「苦味」の真味を考察したい。

2. 兼好に共感した理由

周作人が兼好に共感した契機は，「死」に対する兼好の理解であったと考えられる。彼がはじめて『徒然草』について述べたのは，1924 年 12 月に発表した「笠翁と兼好法師」という文章である。少し引用が長くなるが，ここに紹介しておく。

> あだし野の露，消ゆる時なく，鳥部山の煙立ち去らでのみ住みはつるならひならば，いかに物のあはれもなからむ。世は定なきこそいみじけれ。
>
> 命あるものを見るに，人ばかり久しきはなし。かげろふのゆふべを待ち，夏の蝉の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年をくらす程だにも，こよなうのどけしや。あかずをしと思はゞ，千年を過すとも，一夜の夢のこゝちこそせめ。住みはてぬ世に，みにくきすがたを待ちえて何かはせむ。命長ければ恥おほし。長くとも四十にたらぬほどにて死なむこそ，めやすかるべけれ。

そのほど過ぎぬれば，かたちを愧づる心もなく，人にいでまじらはむことを思ひ，夕の日に子孫を愛し，さかゆく末を見むまでの命をあらまし，ひたすら世を貪る心のみ深く，物のあはれも知らずなり行くなむあさましき。[11)]

これは『徒然草』第七段の内容で，兼好はこの段を通じて，命のはかなさと死の無常観を表している。

それに対して，周作人は次のように言う。

この老法師は仏教でよく知られている話を語っているが，実に人生の道理をよく理解している。…中略…死は本来自然が衆生に与えている負債で，あまり忌避する必要がないが，だからと言って羨望にも及ばない。我々は，兼好法師のいくら長生きしても死なぬのが最も見苦しいことだという言葉に賛成する。しかし，四十になったら必ず首吊りをしなければ趣味がないとは思わない。[12)]

周作人が兼好の話について，それは「仏教でよく知られている話」だと言ったのは，『徒然草』には中国古典でよく知られている話が多く引用されているからである。例えば,「かげろふのゆふべを待ち」は『淮南子』（説林訓）の「蜉蝣朝生而夕死，而盡其樂」を，「夏の蝉の春秋を知らぬ」は『荘子』（逍遙篇）の「惠蛄不知春秋」を,「命長ければ恥おほし」は,『荘子』（天地篇）の「多男子則多懼，富則多事，壽則多辱，是三者非所以養德也」の一節をそれぞれ引用したと周作人は見たのである。

そして,「ゆったりとした心持で暮せば，一年を暮す程の間でも，非常にのびのびとしたもので，飽き足らず惜しいと考えた日には，仮に千年を過して見た所で，丸で一夜の夢のように感ずるに違いない」といった兼好に対して,「実に人生の道理をよく理解している」と感心の意を表した。更に,「四十になったら必ず首吊りをしなければ趣味がないとは思わない」ものの,「いくら長生きしても死なぬのが最も見苦しい」という兼好の思想に共感するようになる。

1917 年，中国では新しい文学思潮として「文学革命」[13)]が開始され，アメリカ留学中の胡適によって文語文を廃し，口語文に基づく「文学改良芻議」が唱えられた。その要求に応じて，周作人は 1911 年に日本留学から帰国して，日本の短歌，俳句，川柳などを次々に紹介した。そして，文学においても「人の文学」,「平民的文学」という文学主義を唱え，国事を積極的に談じた。

このように，新文化運動時代周作人はすべての力を封建勢力への批判と外国文学の翻訳と紹介に注いでいたが，五四運動の退潮とともに彼の文学活動が次第に変化していく。特に 1921 年３月の大患は，周作人の肉体的，精神的だけでなく，思想的，創作的の転換期であったと考える。

それは，1921 年６月５日に退院後，友人の伏園に送った「山中雑信」の次の文章から窺える。

近頃私の思想の動揺と混乱は，既に極度に達したと言える。私は，レフ・トルストイの無我愛とニーチェの超人，共産主義と善種学，耶仏孔老の教訓と科学的検証をすべて尊重しているが，しかしそれを調和し，統一して実行可能な大路を開くことはできない。[14)]

このように現実に対する幻滅とともに思想的に動揺し始めた周作人にとって，兼好の話は，仏教でよく知られている話ではあったものの，それはまさに耶仏孔老の教訓を調和し，統合した人生の哲理であり，彼が求めていた思想の拠り所でもあったと考えられる。

そして，周作人は「世は無常であるからこそ非常によいのである」という兼好の思想に共感し，その四ヵ月後『徒然草』を抄訳し，中国に紹介したのである。

3.『徒然草』抄の題目と掲載順について

1925 年４月,周作人は『语丝』22 期に「『徒然草』抄」を発表した。彼は,『徒然草』全二百四十三段のうち，十四段を選び,それぞれ題目を付けて翻訳紹介した。『周作人日記』[15)]によると，彼が購入した『徒然草』のテキストと注釈書は以下の通りである。

1924 年１月　『徒然草』（著者，出版社不明）
1925 年３月　『徒然草評釈』
（内海弘藏，明治書院，明治 44）
1925 年 12 月『徒然草解釈』
（塚本哲三，有朋堂，大正 14）
1927 年８月　『絵本徒然草』
（和田萬吉，出版社不明）

先述した通り，周作人が「『徒然草』抄」翻訳の際に参考した底本と注釈書について，潘秀蓉が「少なくとも北村季吟の『徒然草文段抄』,伊藤平章の『徒然草講義』,逸見中三郎・神崎一作の『文法附註徒然草要義』などがあった」[16)]ことを検証した。

しかし,北村季吟の『徒然草文段抄』の注釈書のうち，1925 年前に出版されたのは，鈴木春湖注『徒然草文段抄校注』と鈴木弘恭訂正増補『徒然草文段抄』がある。

そこで，本稿では『周作人日記』と潘秀蓉の検証結果を踏まえ，『徒然草』翻訳の際に，周作人が参考にした可能性のある注釈書として，下記６冊に絞って，周作人が翻訳の際に付けた題目が，それぞれ注釈の中にある

言葉なのか，それとも周作人が自ら考えたものなのか，注釈書ではどのような言葉で解釈されているのかを考察し，周作人の『徒然草』に対する理解を検討したい。

(1) 北村季吟著　鈴木春湖注　『徒然草文段抄校注』（鈴木常松，明治 25）
(2) 北村季吟抄　鈴木弘恭訂正増補　『徒然草文段抄』（青山堂，明治 27）
(3) 伊藤平章　『徒然草講義』　（誠之堂，明治 26）
(4) 逸見中三郎・神崎一作著　『文法附註徒然草要義』（葆光社，明治 29）
(5) 内海弘藏著　『徒然草評釈』（明治書院，明治 44）
(6) 塚本哲三著　『徒然草解釈』　（有朋堂，大正 14）

以下に考察した内容を「『徒然草』抄における題目とそれに対応する語釈」[17] にまとめて表 1 に示しておく。

表 1 から，周作人が翻訳の際に付けた題目は，注釈書に拠るものではなく，注釈書に基づいて理解した内容を周作人自身がまとめたものであることが分かった。

周作人は翻訳において，最初に紹介したのは，（一）憂患（第五段）である。

> 不幸にうれへに沈める人の，かしらおろしなど，ふつゝかに思ひとりたるにはあらで，あるかなきかに門さしこめて，まつこともなく明し暮したる，さるかたにあらまほし。顕基中納言のいひけむ，配所の月，罪なくて見む事，さもおぼえぬべし。

1921 年の大患後，精神的，思想的に極度に混迷していた周作人にとって，「不幸に遭って悲嘆に暮れている者が，心から静かに仏道に入って何の期待もなく暮らしている」のは，実に羨ましいことであり，その根底には，心の拠り所を求める周作人の心が窺える。周作人があえて『徒然草』第五段を最初に紹介したのは，世俗と没交渉し，何の拘束もなく閑寂に暮らしたいという兼好の主観への共鳴であり，世の拘束から開放し，自由な生活への憧れが内在していたからだと考えられる。

周作人は（一）憂患（第五段）に続いて，（二）長生（第七段）を紹介したが，それは 1924 年 12 月に「笠翁と兼好法師」という文章で翻訳紹介したもので，周作人が特に兼好の思想に共感した文章でもある。

そして，(三) 中年（第百十三段），(四) 女色（第八段），(五) 訶欲（第九段），(六) 好色（第三段），(七) 独居（第百九十段）のように，色欲についての内容が最も多い。その中で「訶欲」というのは，色欲を厳しく非難したいという意味で，そこには当時周作人が唱えていた婦人解放，自由恋愛と深く関わっていると考えられるが，周作人の女性観については別稿に譲りたい。

続いて，（八）飲酒（第百七十五段）：原文が長いため，抄訳，（九）自然之美（第二十一段），（十）秋月（第二百十二段），（十一）読書（第十三段），（十二）法顕的故事（第八十四段），（十三）愛生物（第百二十一段）の順に掲載されている。原文の内容がそれぞれ，酒の害と趣き，自然の風物から感得する心の趣き，秋の月の独

表 1　『徒然草』抄における題目とそれに対応する語釈

掲載順	『徒然草』	周作人題目	周作人の題目と対応する語釈					
			鈴木春湖注『徒然草文段抄』	鈴木弘恭訂正増補『徒然草文段抄』	逸見中三郎『徒然草要義』	伊藤平章『徒然草講義』	内海弘藏『徒然草評釈』	塚本哲三『徒然草解釈』
1	第五段	憂患	不幸	不幸	不幸	不幸	無し	不幸
2	第七段)	長生	長命なる	長命なる	無し	長寿	長生き	長生き
3	第百十三段	中年	老人	老人	老人	四十八、老人	四十を越した人	四十過の人
4	第八段	女色	色このむ	色にまよふ	色欲	色欲	色欲	色欲
5	第九段	訶欲	女色にまよふ	好色のはなれがたき事	色欲をやめる	色欲をやめる	色欲を戒む	恋の迷を止める
6	第三段	好色	好色	色好む	色このまざらん	色好まさらん	恋の趣き	恋の趣き
7	第百九十段	独居	定て持たる男	定て待たる男	独して居住する	独身	無妻趣味	独身
8	第百七十五段	飲酒		酒を強ひ飲する	酒	酔いたる	酒に酔う	酒をすすめる
9	第二十一段	自然之美	月露風水の哀	花鳥風月	四季のおもしろさ	月花風水	自然の風物	自然の風物
10	第二百十二段	秋月	時節の相応	時節の相応	秋月	秋の月	自然の風物	秋の月
11	第十三段	読書	朗詠	朗詠	書籍	書冊をみる	読書	書を読む
12	第八十四段	法顕的故事	法顕の事	法顕の事	法顕三藏	法師	高僧	法顕三藏
13	第百二十一段	愛生物	鳥を愛する	鳥獣	籠鳥繫獣	鳥獣	動物	生きる物
14	第百二十三段	人生大事	衣食居薬物のこと	衣食居薬物のこと	衣食居医のこと	人と生	「足を知る」の教え	人間としての重大事

特な情緒，古典書籍の趣き，法顕三蔵の人情味，無用の鳥獣を苦しめることに対する戒めであるのに対して，周作人が付けた題目には彼の主観的な感情が強く表れている。

最後に，周作人は（十四）人生大事（第百二十三段）で締めくくっている。原文は，人生の楽として衣食住医を挙げ，それ以外の無益なことをするのは愚かな人であることを述べているのに対して，周作人があえて題目を「人生大事」としたのは，当時思想的に消沈している周作人にとって，人生で最も大事なことは，文学主義，国事というよりも，兼好の提唱する衣食住医でありたいという思想が窺える。

周作人は「『徒然草』抄」の小引で次のように言う。

> 以下に翻訳した十四段は，私が最も趣味的だと感じた文章で，形式は古いが，思想の多くは現代的ある。兼好法師は中国元朝時代の人であるだけに，彼の天才には感服せざるを得ない。[18]

以上述べてきたように，周作人が翻訳紹介した十四段は，彼が兼好の趣味主観，つまり兼好の情緒を最も強く感じた段であり，その題目と掲載順は，周作人の当時の思想と主張の現れであると考えられる。

4. 周作人の『徒然草』観

周作人は「『徒然草』抄」「小引」において，兼好を次のように紹介した。

> 『徒然草』は日本南北朝時代（1332-1392）の代表的な文学作品である。著者兼好法師（1282-1350）は，氏が卜部，京都の吉田に住んでいたので，吉田兼好と称された。後宇多院に仕え奉り，左兵衛佐に任せられ，1324 年上皇の崩御後，修学院に出家し，後に各地を行脚し，伊賀にて没し，年六十九なり。[19]

そして，兼好に対しては様々な説があるとは言え，『徒然草』から見た場合，

> 彼は文人であり，彼の文字には個性が生き生きと投影され，映写されている。彼の性格は確かに不一致である。両巻（『徒然草』上下巻）には禁欲家と快楽派の思想が同時に並存され，これは普通矛盾していると言わざるを得ない。しかし，私はこの点こそ最も興味を感じさせるところだと思う。というのは，これこそ最も人情的で，いかなる極端に傾けるよりもっと自然で，もっと良いからである。[20]

と述べ，周作人が最も『徒然草』に興味を感じるところは，『徒然草』に投影されている兼好の矛盾した性格であり，それは積極的，或いは消極的の一方に傾けるより人情味があると言った。例えば，第八段において，

> 世の人の心まどはすこと，色欲には如かず。人の心は愚かなるものかな。にほひなどは假のものなるに，しばらく衣装に薫物すと知りながら，えならぬ匂には，必ず心ときめきするものなり。久米の仙人の，物洗ふ女の脛の白きを見て，通を失なひけむは，まことに手足膚などのきよらに，肥えあぶらづきたらむは，外の色ならねば，さもあらんかし。

この段では，人の心を惑わすもので一番甚しいのは色欲であることを示唆する一方，久米仙人のようにかなり分別のある者でも，つい色に心が迷い，通力を失ったという矛盾さが窺える。周作人が読み取った「禁欲家と快楽派の人情味」というのは，まさに色欲を戒めとしつつ，凡夫の愛欲によって仙人になれなかったことに同情する兼好の人情味であると考えられる。

更に，周作人は，

> 『徒然草』の最大の価値は趣味性にあると言えよう。巻中には理知的な議論があるものの，決して乾燥で冷酷なものではない。例えば道学家の常態の根底には，一種の温和な情緒が含んでおり，至る所に趣味をもって社会万物を観察しようとしている。ゆえに，教訓の文字においても詩的分子に富んでいるし，我々が読んでいても，常に六百年前の老法師の話がまるで昨日の友人との対談のように思われ，それはとても快い事である。[21]

と，『徒然草』の価値を温和な情緒で社会万物を観察しようとする趣味性に見たのである。

そもそも『徒然草』を趣味論的に捉えた日本の文学者に内海弘蔵がいる。彼はその著『徒然草評釈』で「兼好が趣味論としての徒然草」について次のように述べている。

> この書は，古来，幾十百種の注釈書があるにもかかはらず，まだ，その真意味を解れてゐない，従って，この書の真価は，まだ，世に発揮されず，世間からは又，そのほんとの待遇を受けてゐない，―自分は，かう思ふ。この書を解し，この書を評する学者たちは，いづれも，みな，その見方の二つの標準において，殆ど相一致してゐる。一つは，この書が著しく佛教と老荘思想を受けてるといふこと，一つは，この書には，幾多の，矛盾し，背戻した感想，言説が相錯雑してゐるといふことである。…中略…自分は，二つながら，この評言に與することができないのだ。…中略…兼好の説くところの隠逸なるものは，全く，趣味の上から，――ことに，兼好一流の趣味の上からであって，そこに，そのやかましい主張や，強い

勧誘があるのではない。[22]

内海弘蔵は多くの研究者達が『徒然草』の価値を，一つは，仏教と老荘思想の影響，もう一つは，矛盾した言説が相錯雑していることに見ているのに対して，それを趣味の上から捉え，兼好の無常観，恋愛観は兼好の趣味主観であり，決して強い主張ではないと指摘した。

前述したように，周作人が捉えた「趣味性」というのは，兼好の趣味をもって社会万物を観察しようとすることであり，この点において内海弘蔵の「趣味論」に酷似している。『周作人日記』によると，周作人が「徒然草抄」発表１ヶ月前の 1925 年３月に，内海弘蔵著『徒然草評釈』を購入したことから，周作人の『徒然草』観は内海弘蔵の影響を受けた可能性が高いと考えられる。

しかし，ここで注目すべきところは，周作人は『徒然草』の真価を内海弘蔵と同じく「趣味性」に解いただけでなく，更にそれを発展させ，兼好の趣味に潜まれている「一種の温和な情緒」を見出したという点である。

周作人が翻訳紹介した（五）「訶欲」（第九段）に次のような文章がある。

> 女は髪のめでたからむこそ，人のめだつべかめれ。人のほど，心ばへなどは，物うちいひたるけはひにこそ，物ごしにも知らるれ。事にふれてうちあるさまにも，人の心をまどはし，すべて女の，うちとけたるいもねず，身ををしとも思ひたらず，堪ふべくもあらぬわざにもよく堪へ忍ぶは，たゞ色を思ふがゆゑなり。
>
> まことに愛着の道，その根深く源遠し。六塵の楽欲おほしといへども，皆厭離しつべし。その中に，たゞかの惑のひとつ止めがたきのみぞ，老いたるも若きも，智あるも愚かなるも，かはる所なしとぞ見ゆる。
>
> されば女の髪筋をよれる綱には，大象もよくつながれ，女のはける足駄にて作れる笛には，秋の鹿かならず寄るとぞいひ傳へ侍る。自ら戒めて，恐るべく慎むべきはこの惑なり。

このように，周作人は第八段で通力を失った仙人に同情し，第九段で人間は六塵の欲望から厭離することはできるが，唯一色欲から逃れることができないのは，人間の本能に由来するという兼好の態度に一種の「温和な情緒」を感じ取ったのである。そして，色欲に対する戒めにおいて，それは決して兼好の強い勧誘ではなく，「六百年前の老法師の話が，まるで昨日の友人との対談のように」温かく感じたのは，従来の『徒然草』観には見られない新しい評価であると言えよう。

5. 周作人の思想の変化と兼好の影響について

新文化運動初期において，周作人は積極的に日本と西洋の文化を紹介する一方，思想の面においても「思想革命」（1919），「祖先崇拝」（1919）を発表し，中国の封建勢力と科挙制度に対する批判に力を注いだ。しかし，五四運動の退潮とともに，彼の文学活動は思想的，創作的に転換してきたことは既に述べた通りである。

周作人は 1924 年「沈黙」を発表し，「他人を説得し，或いは弁解するのは，普通なら何ら影響がないが，話をすればするほど漠然とする時は，早めに沈黙を保つほうがいい。それによって人を説得或いは弁明できなかったとしても，少なくとも誤解を増すことはない」[23] と，今の世道において沈黙こそ最もいい方法であることを唱えた。

そして，1928 年には「閉戸読書論」（1928）を発表し，「‘此の時現在’は，唯物論者にとっても霊魂実在論者にとっても危険な時期である。もし官途につく人でなければ，今の中国に幾多の不満や不平を持っているのは間違いない。こうした不満と不平が心の中に積もると，まるで膈症の患者の腹中にある「塊」のように，もし除去する方法がなければ，いつかはきっと命取りになるだろう。では，このかたまりを取り除く方法はあるのか。…中略…私は一日中時間をかけて，やっと一つの方法を見つけた。それは「閉戸読書」である。」[24] と，社会への不満から社会への離脱，人間への離脱を唱え，不満を取り除くためには政治を問わず，世俗と没交渉し，読書に専念すると宣言した。

さらに，1929 年には「世道が衰微し，人心が軽薄になった今時，唖者もなんと手振りで話し出している。しかし，これは暗闇の中ではできないことで，話にならないのだ。孔子曰く，‘邦に道無ければ，行いを危くして，言は遜る’。唖者は，まるで昔の道を行おうとしているのか。」[25] と，世道衰微の今時，物を言わないことが最も有益であると「唖者礼讃」を主張した。

このように，周作人は「文学革命」，「思想革命」から次第に政治に背を向け，「明哲保身」（利口に身の安全を図る），「漠談国事」（国事を論ずるなかれ」を宣告し，文学において「浮躁凌厉」（焦燥で猛烈）から「閑適」へと変っていくのである。

実は，五四新文化運動後の周作人の作品を概観してみると，「初恋」（1922），「娯園」（1923），「喝茶」（1924），「故郷的野菜」（1924），「北京的茶食」（1924），」「苦雨」（1924），「鳥声」（1925）などの閑適小品が多く見られる一方，彼の思想上の葛藤の姿も窺えることに注意した

い。

周作人は1926年に「両個鬼」（紳士鬼と流氓［ゴロツキ］鬼）を発表し，次のように述べている。

友人は人には良知があると言い，キリスト宣教師は霊魂があると言い，正当な道理を維持する学者達は良心に頼るべきだと言う。しかし，私にはこれらがすべてないようだ。あるのは只二つの鬼（紳士鬼と流氓鬼）だけで，私の中ですべての言動を指揮している。これはまさに私の頭の中の二つの政治であり，この二つの与党は意見があまり協調しておらず，私はまるで置時計のようにその間で揺れ動いている。[26]

周作人は当時の社会で誤解を招かないためには，「沈黙」を守ることが最もいい方法だと主張したものの，礼教思想と性道徳の残酷さに対しては絶対的に反抗したり，激烈に批判したりした。彼が自分の中で見た「流氓鬼」というのは，まさにこの時の自分の姿であったろう。

一方，周作人が『语丝』の「発刊の辞」に「われわれは宣伝すべき主義は何一つない。政治経済に対しても，何の興味もない。ただ中国の生活と思想の混濁停滞の空気をつき破りたいと考えるのである。我われわれお互いの思想には相違はあっても，一切の専断と卑劣に対する反抗において背馳するところはない。われわれの週刊の主張は，自由な思想，とらわれぬ判断，そして美の生活にある。」[27] と述べた通り，憂鬱な心を晴らす拠り所として次第に「閑適」文学へと引かれ，そのような自分を「紳士鬼」に見たと考えられる。そして，政治と文学の間で葛藤する心の矛盾を「置時計のようにその間で揺れ動く」と吐露したのである。

更に，周作人は言う。

私は紳士の態度と流氓の精神を愛している。…中略…私はこの二人の鬼とも与党になってほしい。いや，彼らが結婚してほしい。もし一人が女の鬼であれば，その間にきっと理想的な王子が生まれるだろう。[28]

以上のことから「紳士鬼」と「流氓鬼」は，周作人の自我の表れであり，「紳士の態度」と「流氓の精神」を統一したいというところに，彼の理想の人生観が窺える。

周作人が『徒然草』に最も興味を感じたところを「禁欲家と快楽派の思想が同時に並存されている」点にあると指摘したように，彼は「禁欲家と快楽派」の兼好に，「紳士鬼と流氓鬼」の自分の姿を見出したのだろう。

実際，周作人が書いた「閑適小品」には，兼好の思想の影響を受けたと見られるものが多くある。

「笠翁と兼好法師」と同じ時期に発表した文章に「死之黙想」がある。周作人はその文章で，

世間の快楽はむろん貪恋たるものである。しかし，それは青年男女にしか感じられないようである。我々のように「不惑」（四十歳）に近い人は，凡人の苦楽を味わえた。皇帝に成りたいという野心さえなければ，忍びない快楽があるとは想わない。[29]

と「四十になると忍びない快楽がない」と述べているが，それは兼好の「四十にたらぬほどにて死なむこそ，めやすかるべけれ。」という思想に似ており，世の中の無常観を表すところは二人とも一致していることが分かる。そして，このような思想は周作人が兼好に引かれ，徒然草を本格的に翻訳紹介する契機になったと考えられる。

『徒然草』第百七十五段には，飲酒について書いた文章がある。兼好は，酔態は現世でも過失が多く，財産を失い，病気を引き起こし，来世においても人の知恵を失い，地獄に堕ちると酒による害悪を述べながら，「かくうとましとおもふ物なれど，おのづから捨てがたき折も有るべし。」と酒の趣きについて述べている。

一方，周作人は1929年「麻酔礼讃」を発表し，「中国の昔からの国粋的麻酔法は，恐らく飲酒と言えよう。」[30] と述べ，劉伶（晋の竹林七賢の一人，大酒飲み）と陶淵明を挙げて，酒は古くから陶然の趣として中国の人々に愛され，その麻酔力は人を勝境へ，童話の世界へと導いてくれると酒の享楽について述べた。そして，酒の神聖なる楽趣について，

我々は布靴は布靴だとして，自分は冷静だと言うが，実はそれこそ最大な不幸である。何ゆえ十二文の銭を惜しみ，一提の黄湯（酒のこと）を買わず，酔い潰れてこの楽士に入ろうとはしないのか。[31]

と，酒の享楽の知らないのは大きな不幸であるので，十二文のお金を惜しまないでその境地に入ることを讃美している。

そして，最後に，

私はわずか幾口の酒しか飲めないので，麻酔もできず，はっきりと全部見たり聞いたりする。しかし大きな声で叫ぶ力もない。これこそ凡人の悲哀であり，実に何ともしがたいのである。[32]

と，社会に対して不満を持っているが，今はその不満を文学によって批判する力もないと，世道に対する無常観とそれこそ凡人の悲哀であることを示唆した。

周作人は，1935年に「老年」を発表したが，その作品からも兼好の影響が窺える。彼はこの文章で色欲と老年に対する芭蕉の意見に賛同しつつ，1925年に翻訳した兼好の色欲と老年について改めて共鳴を感じると示唆した。

そして，次のように言う。

『徒然草』には好色類の話が多いが，最も面白いのはやはり有名な老年に関する一段である：（第七段訳文）兼好法師は日本南北朝（1332-1392）前半に生まれ，乱世に遭遇したゆえに，その思想は悲観の傾向があるのに対して，芭蕉の元禄時代は徳川幕府の盛期であり，俳文は閑寂を主にしている。したがって，二人の基調は趣味性で，儒教と統合し，老荘思想が加わったのが，類似点である。[33]

このように，周作人が芭蕉に共感し，兼好に引かれたのはまさに趣味を基調とした死への無常観であったと考える。そして，文学により寂しい気持ちを慰めたいと思う周作人にとって，芭蕉，兼好の閑適思想は，中国文人にはなかなか見られない新鮮なものであったと考えられる。

以上，見てきたように，周作人の「閑適」文学には兼好の影響が多く見られる。周作人が政治と文学の間で葛藤しながらも，中庸を目差すことができたのは，『徒然草』を通して読み取った兼好の影響が大きかったと言えよう。

6. おわりに

周作人は 1934 年 9 月に発表した「日本文学を語る」という文章で，『徒然草』と『枕草子』の抄訳について触れ，「読者が興味を持って感服していたが，残念ながら二冊とも特殊な言語が多かったため，全訳が困難であった。私は兼好が好きだ。中国には兼好のような人物像はいない。」[34] と，『徒然草』全訳に至らなかった残念な気持ちと，兼好に感心する意を改めて表した。

そして，1936 年 10 月に発表した「自分の文章」で「社会改革に熱心な諸君は閑適を痛恨し，これはブルジョアの快楽で，飽暖怠惰と大差ないと考えているが，実はそうでない。閑適は一種の得がたい態度で，苦楽貧富を問わず皆できることであるが，また容易に学ぶことではない。」[35] と，閑適は社会からの単なる逃避ではなく，それを目指すことはなかなかいいことであると示唆した。

このように，周作人が他の知識人と違って，閑適を「得がたい態度」と言えるのは，兼好の閑適の趣味性が理解できたからだと考えられる。言い換えれば，周作人が辿りついたのは，まさに「人間をみつめる閑適」であり，「永遠に流れる，無常の流れのなかにうごめいている人間のすがた」であった。

さらに，周作人の「閑適」文学は，社会からの逃避ではなく，思想の苦しさの表れでもなく，趣味を通して見た「温和な情緒」であった。したがって，周作人が自分の受けた日本の影響で「最も顕著なのは兼好法師だ」と言ったのは，「禁欲家と快楽派」の兼好の趣味性に最も共感したからであり，それこそ彼の「閑適」文学における「苦味」の真味だと言えるだろう。

注・参考文献

1) 五四新文化運動とは，1910 年代後半から 20 年代初頭にかけて行われた反封建・新文化提唱の運動である。新文化運動ともいい，「文学革命」の語を広義に使った場合も，これとほとんど同じ内容をさす。運動の中心となったのは雑誌『新青年』（1915 年 9 月創刊，月刊。16 年 12 月の 1 巻 6 号までは『青年雑誌』と題した）である。文学革命の要諦は，人道主義の主張とともに，口語（白話）文学の主張にあり，これは旧支配層に対して，それまで彼らが文化を独占して民衆を支配するための最大の武器としてきた難解な文語文（文言）の放棄を要求することであった。またこの間，家族制度の犠牲者として女性の問題が浮上し，女性解放が課題とされた。新文化運動はこうして目覚めた知識人を生み出し，彼らの手で 19 年の五・四運動が爆発する。一方，新文化運動もまた，民族の生存をかけた反帝国主義の運動と結びつくことで，各階層へと一挙に浸透していったのである。（天児慧・石原享一・朱建栄・辻康吾・菱田雅晴・村田雄二郎編　『岩波現代中国事典』　岩波書店，1999，577p を参照）

2) 本稿では年号の表記について著作で示した年号を基本に，西暦と和暦を併記した。

3) 日中戦争とは，1930-40 年代の日本と中国の戦争。戦争の終わりは 45 年 8 月 15 日（中国では，日本の降伏文書調印日の 9 月 2 日との考え方もある）とするのが一般的だが，起点には大別して 31 年 9 月の柳条湖事件（＊満州事変）とするか，37 年 7 月の盧溝橋事件とするかの 2 通りある。中国では抗日戦争というが，日清戦争を第 1 次中日戦争（甲午中日戦争），この戦争を第 2 次中日戦争という言い方もある。（天児慧・石原享一・朱建栄・辻康吾・菱田雅晴・村田雄二郎編『岩波現代中国事典』岩波書店，1999.）

4）本稿では，便宜上中国語の日本語訳を付すものは全て筆者による。
周作人 「药味集序」『药味集』 北京新民印书馆，1942，2p.
原文：拙文貌似闲适，往往误人，唯一二旧友知其苦味。

5）銭理群 『周作人研究二十一講』 中華書局，2004，17p.
原文：周作人的散文有“浮躁凌厉”与“冲淡平和”两体。前者的思想意义与社会作用显然更加积极，因此常为论者所引述；但真正显示了周作人创作个性，并成为他对中国现代散文艺术独特贡献，而且在实际上影响更大的，却是后者。

6）前掲 5） 92p.
原文：周作人必然地成为中国现代散文小品的主要代表作家的最基本的原因。

7）劉岸偉 『東洋人の悲哀－周作人と日本』 河出書房新社，1991，166p.

8）呉紅華 『周作人と江戸庶民文芸』 創士社，2005，225p.

9）潘秀蓉 「『徒然草』と周作人－その特異な訳文をめぐって－」『和漢比較文学』(29)，2002-08，77p.

10）周作人 『周作人晩年手札一百封』 香港太平洋図書公司，1972.

11）周作人 「笠翁与兼好法師」『語丝』5 期，1924 年 12 月（钟叔河 『周作人文類編⑤上下身』 湖南文艺出版社，1998，36p.）
本稿で引用する『徒然草』原文は，塚本哲三著『徒然草解釈』 友朋堂，大正 14 による。

12）前掲 11） 36p.
原文：这为老法师虽是说着佛老的常谈，却是实在了解生活法的。…中略…死本来是众生对于自然的负债，不必怎样避忌，却也不必怎样欣慕。我们赞成兼好法师老而不死很是无聊之说，但也并不觉得活满四十必须上吊，以为非如此便无趣味。

13）文学革命とは，新文化運動の中心的論題であり，1917 年から開始された。胡適の『文学改良芻議』に端を発した口語文学の主張は，過去数千年間難解な文語体で文化を独占して民衆支配の武器としてきた支配秩序を，根底から覆す革命的意義をもっていた。口語の提唱は文学革命の中心問題であり，一名＜白話（口語）運動＞とも呼ばれる。胡適にこたえた陳独秀は，さらに一歩進めて，貴族文学を打倒して国民文学を建設せよ，と呼びかけ，以後『新青年』はこの主張の機関誌的役割を果し，18 年から全誌を口語に改めた。文学革命も，儒教批判と同様，文化問題であると同時に政治問題でもあった。旧い立場からは激しい反抗が向けられたが，青年達の圧倒的支持によって，この運動は着々と伸びていった。（中国研究所編 『現代中国事典』 岩崎書店，1959，309p.）

14）周作人 「山中雑信」『雨天的書』 岳麓書社，1987，126-127p.
原文：我近来的思想动摇与混乱，可谓已至其极了，托尔斯泰的无我爱于尼采的超人，共产主义与善钟学，耶佛孔老的教训与科学的例证，我都一样的喜欢尊重，却又不能调和统一起来，造成一条可以行的大路。

15）周作人は，1898 年 2 月 18 日から 1966 年 8 月 23 日まで，延べ 68 年の間日記をつけたという。彼の日記には家庭，生活，求学，仕事，創作及び交流，社会活動，思想状況，社会事情などの内容が綴られている。これは周作人と同時代の歴史人物の研究，そして当時の社会歴史，特に中国近現代文学史の研究において有益な資料となる。本研究で参考にした『周作人日記　上・中・下』３巻は，魯迅博物館で所蔵した周作人の 1898 年から 1934 年までの日記で，そのうち 1906 年から 1911 年の日記と 1928 年の日記が欠けている。1935 年以降の日記は紛失されたりしたため，現在所在不明である。

16）前掲 9） 75p.

17）表の中の語釈は，周作人がつけた題目が翻訳の中にある場合は，それに相応する語句を，翻訳の中にない場合は，題目としてまとめた可能性の高い文章に相応する語句を調べたものである。

18）周作人 「『徒然草』抄」『語丝』22 期　1925 年４月（钟叔河 『周作人文類编⑦日本管窺』湖南文艺出版社，1998，329p.）
原文：所译十四节是我觉得有趣味的文章，形式虽旧，思想却多是现代的，我们想到兼好法师是中国元朝时代的人，更不能不佩服他的天才了。

19）前掲 18） 328p.
原文：《徒然草》是日本南北朝时代（1332-1392）的代表文学作品。著者兼好法师（1282-1350）本姓卜部，居于京都之吉田，故通称吉田兼好。初事后宇多院上皇，为左兵卫尉，一三二四年上皇崩后在修学院出家，后行脚各处，死于伊贺，年六十九岁。

20）前掲 18） 329p.

原文：他是一个文人，他的个性整个地投影在文字上面，很明了的映写出来。他的性格的确有点不统一，因为两卷里禁欲家与快乐派的思想同时并存，照普通说法不免说是矛盾，但我觉得也正在这个地方使人最感到兴趣，因为这是最人情的，比倾向任何极端都要更自然而且更好。

21）前掲 18）　329p.
原文：《徒然草》最大的价值可以说是在于他的趣味性，卷中虽有理智的议论，但决不是干燥冷酷的，如道学家的常态，根底里含有一种温润的情绪，随处想用了趣味去观察社会万物，所以即在教训的文字上也富于诗的分子，我们读过去，时时觉得六百年前老法师的话有如昨日朋友的对谈，是很愉快的。

22）内海弘蔵　『徒然草評釈』　明治書院，明治 44，1-7p.

23）周作人　「沈黙」『雨天的書』　岳麓書社，1987，123-124p.
原文：自己想说服别人，或是有所辩解，照例是没什么影响，而且愈说愈是渺茫，不如及早沉默，虽然不能因此而说服或辨明，但至少是不会增添误会。

24）周作人　「閉戸読書論」『永日集』　河北教育出版社，2002，113-114p.
原文：此刻现在”，无论在相信唯物或是有鬼论者都是一个危险时期。除非你是在做官，你对于现实的中国一定会有好些不满或是不平。这些不满和不平积在你的心里，正如噎嗝患者肚里的“痞块”一样，你如没有法子把他除掉，总有一天会断送你的生命。那么，有什么法子可以除掉这个痞块呢？…中略…我想了一天才算想到了一个方法，这就是“闭户读书”。

25）周作人　「唖者礼讃」『看雲集』　実用書局，1932，15p.
原文：世道哀微，人心不古，现今哑巴也居然装手势说起话来了。不过这在黑暗中还是不能用，不能说话。孔子曰，「邦无道，危行言逊。」哑巴其犹行古之道也欤。

26）周作人　「両個鬼」『談虎集』　北新書局，1936，252p.
原文：朋友说人是有什么良知的，教士说有灵魂，维持公理的学者们也凭着良心，但我觉得似乎都没有这些，有的只是那两个鬼，在那里指挥我的一切的言行。这是一种双头政治，而两个执政还是意见不甚协和的，我却像一个钟摆在这中间摇着。

27）尾坂徳司　『中国新文学運動史』　法政大学出版局，1971，179p.

28）前掲 26）　253p.
原文：我爱绅士的态度与流氓的精神。…中略…我希望这两个鬼能够立宪，不，希望他们能够结婚，倘若一个是女流氓，那么中间可以生下理想的王子来。

29）周作人　「死之黙想」『雨天的書』　1987，16p.
原文：人世的快乐自然是可贪恋的，但这似乎只在青年男女才深切的感到，象我们将近“不惑”的人，尝过了凡人的苦乐。此外别无做皇帝的野心，也就不觉得还有舍不得的快乐。

30）周作人　「麻酔礼讃」『看雲集』　実用書局，1932，18p.
原文：中国古已有之的国粹的麻醉法，大约可以说是饮酒。

31）前掲 30）　19p.
原文：我们将棉鞋当棉鞋，自己说是清醒，其实却是极大的不幸，何为可惜十二文钱，不买一提黄汤，灌得倒醉以入此乐士乎。

32）前掲 30）　21p.
原文：我只会喝几口酒，而有不能麻醉，还是清醒地都看见听见，又无力高声大喊，此乃是凡人之悲哀，实为无可如何者耳。

33）周作人　「老年」『風雨談』　岳麓書社，1987，13-14p.
原文：此外同类的话尚多，但最有意思的还是那顶有名的关于老年的一篇：（第七段译文）兼好法师生于日本南北朝（1332-1392）的前半，遭逢乱世，故其思想或倾于悲观，芭蕉的元禄时代是德川幕府的盛时，而诗文亦以枯寂为主，可知二人之基调由于趣味性的相似，汇合儒释，或再加一点庄老，亦是一种类似之点。

34）周作人　「閑話日本文学」『国聞週報』11 巻 38 期 1934 年 9 月（钟叔河　『周作人文類编⑦日本管窥』湖南文艺出版社，1998，382p.）
原文：读者都觉得有趣且钦佩不止。但遗憾的是两者都用了不少的特殊语言，全译则困难了。兼好，我是喜爱的，在中国那样的人像是没有。

35）周作人　「自己的文章」『青年界』10 巻 3 期　1936 年 10 月（钟叔河　『周作人文類编③本色 文学·文章·文化』　湖南文艺出版社，1998，327p.）
原文：热心社会改革的朋友痛恨闲适，以为这是布尔乔亚的快乐，差不多就是饱暖懒惰而已。然而不然。闲适是一种很难得的态度，不问苦乐贫富都可以如此，可是又并不是容易学得会的。

（平成 23 年 3 月 30 日受付）
（平成 23 年 7 月 12 日採録）